

Ⅲ
原宿の職場句会より



原宿の職場句会より

花冷えや乳房に走る痛みあり

店頭のとマトは青し雨続く

亡き母のゆかたもありて衣更

蟬とる子かまえたるまま動かざる

背伸びして七夕飾るあねいもと

ゆめ女

炎天の道ただ白くひとすじに

白菊に絵筆も添えて棺を閉ず

供えたる菊枯れるころ人も絶え

秋の雨寺静もりて暮れにけり

エナメルの靴光りたり秋晴れに

秋暑し病みたる犬の息弱く

冬日あわく啄木の筆きれぎれに

原宿の職場句会作品集「あとがき」

昭和五十一年六月、初めての句会から、昭和五十五年八月桜井さんとのお別れ句会まで、とぎれとぎれに続いてきた句会が坊城先生のトルコ行きと共に長いお休みになってしまった。しかし、こうして第一回からのノートを見るとその折々のそれぞれの想いが句に託されていて、なつかしい。

句には、時にはそれぞれのわが子が、時にはわが夫が登場するが、当時まだ幼さの残る少年少女であった子どもたちも、七年の歳月のうちに青年や物思う乙女へと成長し、夫たちの身辺にもさまざまに変転が見られる。

本来、句集というものは、かなり上達してから上梓すべきものである。

しかし、敢えてささやかな句集として形にしたかったのは、句の巧拙を越え、そこにはその時のあるがままの姿があり、それをそのままの形でとどめておきたかったからである。もちろん、「これを句集として印刷するなんて穴があったら入りたい」という思いも、句会のメンバー自身にある。

「下手でもいいじゃない。楽しかった句会の記念として、大事にしまっておきましょう

うよ」

言い出しつべに説きふせられて、手も加えず生まれた赤子のような句集である。もうじき坊城先生がトルコから帰ってこられる。

先生がいらつしやらないと、いつこうに句作に励まない弟子たちだが、先生がお見限りでなければ、また再び原宿句会が開かれる日も近いことであろう。そして、二冊目は、きつとすばらしい句集ができるはずである。

昭和五十八年五月

芹沢茂登子記

句会

一九八七年七月十二日

六月十一日、久々に句会なるものに出席した。俳句は取手の叔父や氏家の叔父がやっていて、少女の頃からなんとなくいつかは作りたいたいと思っていたが、十年程前、虚子の孫にあたられる坊城中子さんと、たまたま一緒に「赤ちゃん一一〇番」の仕事をする機会を

得、それがご縁で、相談員たちで句会をするということになった。毎月一回、その時にはもう稲田登戸病院の総婦長という要職にあつて、「赤ちゃん一〇番」には来ていらつしやらなかつた坊城さんが、わざわざ病院から駆けつけて下さつた。

職場の一室で、仕事仲間たちが集まつてする句会は気が置けず、大変楽しかつた。ほとんどが初めて俳句をつくるという仲間たちだったが、それぞれが作る句にも選にもその人らしさが出て、楽しく、時の経つのを忘れるほどであつた。途切れがちではあつたものの数年は続いていたろうか。坊城さんのご主人がトルコに転勤なさることになり、師を失つてその会もそのままになつてしまつた。

それから数年、忙しい日々が続いた。作ろうと思えばどこでもいつでも作れる筈なのに、是が非でも提出しなくてはならない句会がないと、つい作らない。せつかく句作の糸口をつけていただいたのに、不肖の弟子はそれから数年を作らずじまいで過ごしてしまつた。

しかし、胸の底にはいつも俳句をやりたい、俳句をやりたいという思いがあつた。定年になつたら始めよう、固く心に決めていた。坊城さんもトルコから帰られ「月に一回渋谷の桜ヶ丘で気らくなお仲間と句会をやっているから、ぜひいらつしやい」とおっしゃつて下さつていた。

五十五歳定年を過ぎて、シンポジウムやら何やらとまだ忙しい日が続いた。今年から

は、自分がやりたいと思つていて長年やれないできたことをやろう、そう心に誓つた。身分的に相談員にさせていただき、もう今度こそ句会に参加できると思つた。

ところが四月から新しく開設する相談の責任者となり、心に誓つた四月も五月も夜の予定と重なつていけない。でも、もうそんなことを言つていたら、いつまでも願いがかなえられない。

六月からは必ずその日だけは何かと重なりませんようにと願つていて、やっとその願いがかない、六月九日紀善会という句会に参加することができたのである。

その数日前、昔の職場の俳句仲間である神馬さんにその旨を告げたら、彼女も「行く、行く」と言う。そこで二人しての参加となつた。

桜ヶ丘日電健保会館の和室が会場だつた。二〇畳程の畳の部屋の真ん中にテーブルが長く置かれ、夕食の幕之内弁当が人数分置かれてゐる。東急プラザで待つていて下さつた坊城さんに案内されて、座に着く。お仲間の大半は女性で、年配も四〇代五〇代六〇代か。坊城さんの病院のお仲間も加わつておられるようである。

やがて師である橋川忠夫さんとかず子夫人が席に着かれる。温厚な紳士に黒髪も豊かな美人で妖艶な夫人、幹事さんのご挨拶によると、何やら事情はわからないが橋川先生は前回で指導をお辞めになり、句作に専念したいということであつたらしいが、やはり続けて

下さることになったとか、そんな挨拶の一場面があつて、「梅雨一切」「なめくじ」「さくらんぼ」という兼題のもとに句会が始められた。

あまり良い句とは言えないが、

さくらんぼつまみし指の白きこと

梅雨明けはこの日あたりと旅程決め 他

を提出する。

紫陽花の決まらぬ色の芯にあり

梅雨避けて大白犬の軒に伏す

また一つ逝きし門あり梅雨の露地

壺のバラ溢れんばかりティータイム

○用さばく手順にまずは髪洗う

○葛飾の水豊かなり花菖蒲

○六月の夕暮らしき雲流れ

○飲談は休まず減りしさくらんぼ

○螢火の流れて残る闇深し

初めの四句が私の心に残り、あとの○印五句は先生の選ばれた特選の句、いずれもその

中子

研

としあつ

かづ子

シ

情景が思い浮かべられて、うまいなと思う。

ふと見ると、何のさえぎるものもない一面のガラス戸ごしに月が昇っていた。満月だった。

「まあ、みごとな満月ですこと」

と、句座がどよめいた。そこで、すかさず坊城中子さんが作った句。

夏の月満ちて句座をばにぎわせり

まことに趣きの深い句会となった。

あとがきに代えて

芹 沢 寿 良

妻茂登子は、病院でも自宅でも、常に病床の枕元に小さな鉛筆を挟んだ手帳やノートを置いていましたが、身体を横たえて短歌づくりに耽っている時、よく浮腫んだ指を折って数えていました。そんな姿を思い出すと目頭に涙が滲んできます。故人は最初の入院経験をまとめた一九九三年の著書『病院はおもしろい』の末尾に「……入院中にわか歌人になって、その後ブツンとなくなってしまった短歌づくりも女学校の同級生のHさんやTさんのお誘いを受けて、短歌の会に入れていただくことになった。これもご縁と思い、末長く続けていきたいと思う」と書いていましたが、以来、短歌づくりを生きている証しの一つとして「サキクサ短歌会」竹の香支部の会員として皆さんとご一緒に亡くなるまでの六年間短歌づくりを学び続けてきました。

一九九七年夏からの闘病生活を綴ったノートにも「五年前の入院がきっかけになってお仲間に入れていただいた短歌。女学校の同級生の竹の香支部に入れていただいて短歌をつ

くるようになってよかった。何もできない時、短歌をつくる。それが生活の大切な一片一片となつている。そして「サキクサ」誌に「女性の短歌から見た昭和と戦争」の連載を書かせていただくことにもなり、諸資料を調べながら今それにとりこんでいる。今回も入院前になんとか書いて送ったが、諦めずにやりつづけたいと思う」（一九九七年七月十三日）と書いていました。

この連載関係の諸資料の収集につきましては、私も公立図書館等に出かけて、故人が指定した古い新聞のマイクロフィルムを読んで、プリントし、また戦前の婦人雑誌の短歌欄をコピーするなどして協力してきましたが、故人がこの仕事を継続していく上でどうしても手元に揃えて利用したいと言っていた「昭和万葉集」全巻を私が何日もかけてあちこちの古本屋を廻って破格に安い値段で手に入れた時、「やっぱりお父さんは、古本探しは名人ねー、うれしい」と大喜びしていたことが、つい昨日のことのように思い出されます。

一九九八年八月、亡くなる一カ月ほど前に、「退院して約三カ月、身体の回復は思ったほどには回復していない、歩行困難、背中が痛むというかなり重篤な身体状況」下で、いろいろ悩みながら仕上げた膠原病と骨粗鬆症との闘病記のなかに「今、思うこと」をいくつかあげ、その一つとして「短歌をつくるよろこび」を次のように書いています。

「一九九二年、初めて病気で入院したとき、入会させていただいた「サキクサ」（大塚布

見子先生主宰)の月刊誌『サキクサ』には、毎月十二首をつくって送っている。また、『女性の短歌から見た昭和と戦争』というタイトルで毎号連載原稿を書き、これも欠かさず連載されている。病中、つらいときも、期日までに提稿しなければ、という気持ちだが却って励みになってきた。今後もつづけ一冊にまとめたいと思っている」そして、最後に次のような短歌四首が書かれていました。ご紹介しておきます。

杖なしに近くの道を歩きゐて喜びてゐる夢を見てをり

川沿ひの道を杖なく歩きゐてふしぎと思へば夢さめにけり

さまざまな薬飲みゐて味のなく箸をつけつつ気落ちしており

もやもやとしたる頭の不快にて寝る時のくるをひたすら待ちぬ

当初、追憶集『人生交響楽・追憶 芹沢茂登子』に、『サキクサ』誌に掲載されました。全ての短歌四五八首と「女性の短歌から見た昭和と戦争」その他の作品を収めることを考えましたが、これらは別の形で遺す方がよいのではないかと考えるようになり、その後遺品整理のなかで出てきました俳句とその関係の文章をあわせまして「臥しゐても 芹沢茂登子歌集」とさせていただきました。このタイトルとしたのは、いくつも案が浮かびましたが、故人の短歌づくりが闘病にはじまり闘病におわって、したがって絶詠を含めて病床詠が多くなっていることを考慮したからであります。

故人は、ダイヤル・サービスで「赤ちゃん一〇番」のカウンセラーの仕事に就いてから、まもなく職場で俳句をつくるサークル活動をおこなっており、その時の故人を含めた皆さんの作品を記入した一冊のノートが発見されました。また、故人が十年程前にもある句会に参加して、「趣きの深い句会」に感動した時のことを書いた文章が別のノートに遺されていました。

編集にあたりましては、濱口喜久子さんと坂口 郁さんに特別のご協力をいただきました。濱口さんは、「サキクサ短歌会」の同人で、故人の女学校以来の五十年を越す親しい友人であり、坂口さんは、戦後、同じ時期にすれ違いに故人が転出した大阪の女学校に転入し、故人は坂口さんが転出した東京の女学校に転入し、大阪での担任は兩人とも同じ先生であったという偶然が重なり、それから半世紀近く経過して、「サキクサ短歌会」の会員として再び顔を合わせ、また、二人がそれぞれほぼ同じ頃に戦時下の女学生生活の記録をまとめる仕事をしていたという縁の糸で結ばれていた友人であります。こうしたことから「サキクサ」誌の故人の短歌についてのコメントを濱口さんをお願いし、「女性の短歌から見た昭和と戦争」と「大原富枝と『婉』の足跡を訪ねて、そして短歌のことども」についてのコメントは坂口さんをお願いしてお引き受けいただきました。お二人には、また歌集を単行本とすることについても、細々としたことまでいろいろとご相談に乗っていた

いただきました。心より厚く御礼申し上げます。

故人のこうした分野の活動について、関係者の方々から「文章も、歌も平明そのもので、歌を大切に思っている」とか、女性の短歌と戦争についての連載は「貴重な仕事」と評価されましたことを大変嬉しく思うとともに、私自身も故人のことをもつと深く知るためにも、この歌集から少しずつ歌の勉強をしていきたいと思っております。

サキクサ短歌会の大塚布見子先生をはじめ、竹の香支部の皆様には故人が晩年生きがいのひとつとしていた短歌の勉強でいろいろとご指導をいただきました。最後に、このことに対しまして、故人の連合いとしてあらためて深く感謝申し上げます。